

「絶対正解、
星崎先輩」

小竹
理央

登場人物

星崎忠（30） 会社員。川田の先輩。

川田雄太（25） 会社員。

木村花（25） 会社員。川田の同期。

鈴木信夫（55） 会社員。

杉本義雄（50） 部長。

黒木和成（43） 課長。

西川渉（30） 星崎の元同期。

森下健太郎（25） 川田の同期。

柴田徹（25） 川田の同期。

竹中真紀（28） 会社員。

第一章『俺の正解』

○株式会社「Clean Apple」・オフィス

社員が急がしそうに働いている。

星崎忠（30）、椅子に座りながら陰しい顔で資料に目を通してている。川田雄太（25）、星崎の様子を伺っている。

川田「俺は星崎先輩が苦手だ。なぜかって？
それは…」

星崎「川田、こことここ、間違ってるぞ。やり直し。（性格悪そうな感じ）」

川田「…はい。」

川田M「星崎先輩はいつでも正解だからだ。」
川田、自分のデスクに戻る。

川田「あーもう！これで添削4回目だよ…確かに、俺の文章分かりづらいけど…ほんと気に食わねえ。」

鈴木信夫（55）、川田のもとにやって来る。

鈴木「川田くん、ご苦労さん。」

川田「鈴木さん：俺また修正食らいました。
これで4回目ですよ！？」

鈴木「あゝ星崎君に見てもらってるのか。それは災難だったね。」

川田「全くですよ：！」

鈴木「でも星崎君はいつでも正しい。彼のもとに居れば、川田くんもそのうち彼みたいになれるんじゃないかい？」

川田M「なりたくねえよ。鈴木さんっ！完全に洗脳されているっ！鈴木さんは星崎先輩信者だもんな。」

○同・休憩スペース

川田、コーヒーを準備している。

木村花（25）、川田のもとに来る。

木村「川田くん、お疲れ様。」

川田「き、木村さん。お、お、おつかれ。」

木村、川田の顔を覗き込む。

川田「なに：？」

木村「なんか、疲れてる？大丈夫？仕事、頑張りすぎないようにね！ファイト！」

川田「お、おう！ありがと。」

○同・オフィス

星崎、資料を持ちながら立ち上がる。

星崎「川田、ちよつと来い。」

川田「あっはい。」

川田、立ち上がり、星崎のデスクに向かう。

星崎「今度、我が社の新規プロジェクトとして新商品のアイデアを有望な若手社員から募る公募が行われる。もしアイデアが採用された場合、賞金は50万。そしてもちろん商品の販売に向けて企画、開発、宣伝活動も行われる。」

川田「星崎先輩：もしかしてそれを俺に任せて頂けるんですか？」

星崎「お前には俺たち商品プロモーション部のホープとして活躍してもらいたい。」

川田「できるか？」

川田「はい！もちろんです！やります、やらせて下さい！」

川田M「うひょー！ついに俺にも運が回って来たってわけか！」

川田「ガッツポーズをする。」

木村「通りがかりで川田と目が合い、喜んでる川田と笑い合う。」

○スーパー・掃除用具コーナー

川田「掃除用具を色々手に取り見比べている。」

川田「こっちはフローラルミストとファンシードーズか。なるほど、なるほど。」

○株式会社「Clean Apple」・オフィス

川田「コピー機で印刷している。」

川田「20代女性にはピンク、水色などのパステルカラーが人気の傾向あり：なるほど、なるほど。」

○同・食堂

川田、女性社員たちが座っている近くに座る。

社員1「ねえ、見て見て。最近、ネイル変えたの！キラキラで、見るたびにQOL爆上がり。」

社員2「えくめっちゃかわいい。どこでやってもらったの？」

社員1「銀座の：」

川田、メモを開き書き込む。

川田M「トレンドは、キラキラしているもの。つと。なるほど、なるほど。」

○同・オフィス

川田「出来たー！トレンドは完全に抑えた。」

さすがにこれであの星崎先輩もきつと

…」

× × ×

妄想。

星崎、資料を手に涙を流している。

星崎「川田、なんだこの商品は。最高じゃな

いか。」

川田「星崎先輩…」

星崎「抱きしめてもいいか…？」

川田「はい、もちろんです！」

♡人熱い抱擁を交わす。

× × ×

川田「待ってる、星崎！」

○同・会議室

川田、パワーポイントで商品の詳細を映す。

川田「商品開発では若い女性に的を絞り、ふんだんにトレンドを織り交ぜました。」

今回ご紹介する商品はトレンドのパス
テルカラーを使用したお掃除モップで
す。見るたびに心躍るようにラメを施
し、更になんと、なんと、フローラル
ローズの香りでお掃除が楽しくなるよ
うに工夫した、その名も「キラキラ香
るモップ」です。」

星崎「…」

川田M「来るぞ、来るぞ…」

星崎「川田、なんだこの商品は。」

川田「はい。」

星崎「駄作じゃないか。」

川田「（ハグ受け入れ態勢で）はい、もちろ
んです。…ん？今何て？」

星崎「聞こえなかったか。駄作だよ、だ・

さ・く。」

川田M「はあー！？」

星崎「ターゲット、実用性、ネーミングどれ
もダメだ。平凡で面白みがない。それ

と一つ聞かせてくれ。これを川田は買いたいと思うか？」

川田「か、か、かい、か…」

星崎「即答できないなら、それが答えだ。やり直し。」

○居酒屋・（夜）

川田、木村、森下健太郎（25）、柴田徹（25）がお酒を飲んでいる。川田、机に突っ伏している。

森下「そんな落ちこむなって。まだ本番当日まで時間あるんだろ。」

木村「そうそう、今回指摘してもらえたんだから、もっといい物ができるってことだよ。」

川田「でも、でも…あんな強く言わなくていいのに…駄作って…」

柴田「まあでも、ターゲット、実用性、ネーミングって商品開発で抑えるべきポ

イントだしな。俺は星崎先輩正しいと思う。」

川田「正論すぎてなんも言えねえ。」

森下「よ！令和の北島康介！」

川田「ふざけんなよ。こっちは真剣なんだぞ。」

木村「ターゲットとか、商品のアイデアはど
うやって考えた？」

川田「いや普通に？ターゲットはなんとなく。で、商品のアイデアはターゲット層で流行ってるものを分析して、俺なりに結構ちゃんとやったつもり。」

木村「ふーん、そっか…」

川田「何？なんかあるなら言って？」

木村「うーん、まず考えるべきはターゲットかな。自分が使いたいものを考えるなら、自分をターゲットとして考えてみるのどうかな？」

川田「自分をターゲットにかあ。」

森下「まあまあ、そんなのいいじゃん。今日

は飲んで忘れよう！」

川田「お、おう。そうだな…」

柴田「カンパニー！」

○株式会社「Clean Apple」・オフィス・（夜）

川田、腕を組んで座っている。

川田M「自分が欲しいもの？自動掃除機！…

はルンバでいいか。シンクの汚れ落

とし！はもううちの会社で作ってる

し…やっべ、なんつも思いつかな

い！正解はなんだ、何なんだ…」

川田「どうすりゃいいんだよ！」

星崎、来る。

星崎「川田」

川田「はいっ」

星崎「コーヒー、付き合ってくれ。」

川田「あ、はい。」

○同・廊下

星崎、川田にコーヒー缶を渡す。

川田「あざーす…」

星崎「川田、お前はいつも正解が何か考えているな。では、 $1 + 1$ はなんだ？」

川田「…2です。」

星崎「不正解だ。」

川田「え、なんでですか？」

星崎「では川田、雲と雲を合わせたらいくつの雲になる？」

川田「1つの雲です。（めちゃくちゃ屁理屈じゃねえか…）」

星崎「ああ、そうだ。川田さつき、何を足すか確認しなかつただろ。物の見方次第で正解は完全に異なる。それは何ににおいても同じだ。」

川田「はあ。そうですねー。（この人本当に苦手だわ、俺…）」

星崎「あんぱん、川田も食うか？」

川田「せっかくなんで、いただきます。」

星崎「分け合った方が食いもんはうまい。」

川田「1個を分けたのに、幸せは2倍ってか
：うま。」

星崎「もう8時だ。身の回り掃除して今日は
帰れ。」

川田「はい。」

○同・オフィス・（夜）

川田、机を拭いている。

川田「うわ、こんなに汚れてる。綺麗に見え
ても意外と埃、溜まってるな。」

○同・休憩室・（夜）

川田、床をモップ掛けしている。

川田「よ、ほ、ふうー。こんなに綺麗だった
んだ、この床。明日みんな来たら驚く
ぞ。（笑）」

× × ×

回想

木村「自分が使いたいものを考えるなら、自分をターゲットとして考えてみるのは
どうかな？」

× × ×

回想

星崎「物の見方次第で正解は完全に異なる。
それは何においても同じだ。」

× × ×

川田、閃く。

川田「あ、そういうことか！」

川田、急いでデスクに戻りパソコンに
打ち込む。

○同・オフィス

星崎、川田が持ってきた資料を読んで
いる。

川田「掃除という言葉聞いたときに、俺は
面倒だとか、汚れるし嫌なイメージ
を思い浮かべます。でも、実際始める
ともっと綺麗にしたいとか、綺麗にな

ったものを他の人に見せたら驚くだろうなって想像して嬉しくなる。つまり、掃除には心を綺麗にする作用があると思います。」

星崎 「それで？」

川田 「そこで思いついたのが、この「ココキレモップ」です。モップ自体に使い捨てのティッシュが付いているので、一度使ったティッシュを捨ててからすぐに次のティッシュを装着出来ます。」

星崎 「「ここを切れ」と「心を綺麗に」で、ココキレか。」

川田 「その通りです！あと、この商品のターゲットは、俺自身です。」

星崎 「…川田。最後に聞くが、お前はこれを買いたいと思うんだな？」

川田 「はい！」

星崎 「よし、これで行こう。」

川田 「ほんとですか！？イエス！イエス！」

○同・会議室

会社のお偉いさんたちが椅子に座って
川田の発表を見ている。

星崎、木村、立って川田の発表を見て
いる。

川田「これが、私が考案した「ココキレモツ
プ」です。ご清聴ありがとうございますま
した。」

司会者「それでは、幹部からの投票に移りた
いと思います。こちらにお越しいた
だき、投票用紙を：」

木村「川田くん、発表すごく良かった。」

川田「ありがとう、木村さん。」

× × ×

投票が終了する。

司会者「それでは発表致します。選ばれた商
品は：「ココキレモツプ」です！」

川田「やったー！」

木村「おめでとう！」

星崎、ニコツと笑い、会議室を出ていく。川田、星崎を追いかける。

○同・会議室の廊下

川田「星崎先輩！どこ行くんですか？」

星崎「仕事に戻るんだ。」

川田「俺、やりましたよ。選ばれました。星崎先輩のおかげで。」

星崎「やはり、俺の選択はいつでも正しい。」

川田「もしかして、俺に掃除をさせたのも全部戦略ですか？」

星崎「さあな。」

川田M「ちえっ。少しは褒めてくれてもいいのに。」

星崎「…さっきのプレゼン、他の誰よりお前が一番良かった。これからもよろしく頼む。」

川田「星崎先輩：はい！俺、頑張ります！」

星崎、振り返らず手を振る。

川田 M 「俺は星崎先輩が苦手だ。でも今日は後ろ姿がかっこいいと思った。」

第二章 『チームの正解』

○株式会社「Clean Apple」・オフィス

社員が働いている。一人の社員は肩を痛めている。一人の社員は眠そうにウトウトしている。

川田、忙しそうに仕事をしている。

川田 「あー、これもまだ終わってないし、30分後には会議か。まずいな…」

鈴木 「川田君、これコピー取ってくれる？」

川田 「え、あ、はい、後でやっておきます。」

川田、黒木和成（43）のデスクに向かう。

川田 「黒木課長、この資料出来上がったんですけど、誰に渡せばいいですか？」

黒木 「あ、えーと、今忙しいからまた後で来てくれる？」

川田 「いや、でも今日はこの後時間なくて…」

黒木、川田を無視して仕事を続ける。

杉本義雄（50）、腕に付けている心拍計を見る。

星崎、その様子を見ている。

杉本「鈴木君、午前中にお願ひした資料、印刷できてるか？」

鈴木「いえ、まだ：」

杉本「どうして出来ていないんだ。できないならできないと言ってくれないと困るのはこっちなんだぞ！」

鈴木「すみません。」

○同・会議室

杉本、黒木、川田を含む社員が座っている。

杉本「どういうことだ！中間発表の予定日はとつくに過ぎているじゃないか。」

黒木「もともと時間が限られていましたし、半ばで急に条件変更があった関係で：」

杉本「どうして今伝えるんだ！？」

黒木「申し訳ございません！」

杉本、腕に付けている心拍計を見る。

星崎、その様子を会議室の外から見て
いる。

○同・休憩室

川田、コーヒーを淹れている。

星崎、川田の隣に来る。

星崎「川田、なんだこのチームの雰囲気は？」

川田「あー。部長がご機嫌斜めだからですよ。

あの人、人使い荒いじゃないですか。

社員を人だと思っ
てないんじゃないで
すか？だから、みんな振り回されて疲

弊してるんです。」

星崎「そうか。わかった。」

星崎、休憩室を出る。

○同・オフィス

星崎、杉本の席に行く。

星崎「杉本部長。少しお時間よろしいです

か。」

杉本「星崎、どうした？」

星崎「部長、このプロジェクトから外れてください。部長の指示は無茶なことが多く、皆苦勞しています。ほら、ご覧ください。みんな嫌がっていますよ、部長と働くことを。」

川田、走ってやって来る。

川田M「こいつ、言った：！それは言わない

お約束だろ：もうおしまいだ：」

杉本「そんなに俺と働くのが嫌なのか！ならもういい。俺は帰る。お前たちだけでやってみろ！」

部長、荷物をまとめて出口に向かう。

川田「部長、い、今のは本心ではなくて、冗

談で：部長？部長！」

川田M「星崎先輩、また余計なことを：どうしてこうなっちゃうんだよ：もう。」

○同・オフィス・（夜）

杉本を除いた社員が忙しそうにしている。

竹中真紀（28）立ち上がる。

竹中「どなたか、見積もりの申請方法わかる

方いますか？」

黒木「部長がいつもやっていた業務だ。時間

はかかるが、俺がやる。」

竹中「ありがとうございます。」

黒木「みんなちょっと聞いてくれ。明日の3

時からのミーティングは部長無しで製

品紹介を行う。普段より入念に詳細チ

ェックして不備がないようにしてく

れ。」

鈴木「…しかし、時間がないですよ…全員手

一杯ですしねえ。」

黒木「ええ、ですが、こういう時こそ、皆協

力して、乗り越えましょう。」

川田「こんなんじゃないかなに残業しても終わ

らないじゃんか。」

星崎「川田、収納棚から案件資料持ってきてくれ。」

川田M「それくらい自分でやれよ：そもそもこの状況になったの誰のせいだと思っ
てんだ。」

川田「：わかりました。」

○同・収納棚の前

川田、案件の資料を探す。

川田「えーっと8月の案件は：これか。よし。」

パラパラとメモ用紙が落ちる。

川田「ん？」

メモには部長が残した細かい案件の注意事項と各社員向けのコメントが記載されている。

川田「これって：」

杉本M「黒木君はマネジメント力は十分だが、
場合によって抱え込みすぎるので声かけを忘れずに行う。鈴木君は長年のス

キルは誰にも負けない。全体では自発的に発言しない人なので、個人で確認を取ること。」

川田「部長：こんなメモ書いてたんだ：」

川田、メモをペラペラとめくる。

川田「俺は：将来有望？やる気は十分なので積極的に仕事を任せる。足りない部分はチームでフォローする。」

川田、涙ぐむ。

○同・オフィス・（夜）

川田、杉本の机を見つめている。

星崎「川田、何してる。早くしないと終わらないぞ。」

川田「星崎先輩、さっきのわざとですよ。」

星崎「訳の分からないこと言わず、仕事だ、仕事。」

川田「ふっ。相変わらずだな、先輩は。はい！やります！」

○杉本の家の前

川田、周囲を見渡して杉本を待っている。杉本、玄関から出てくる。

川田「杉本部長！」

杉本「川田、一体こんなところで何してんだ？」

川田「部長に会いたくて、待ってました。」

杉本「外は冷えるだろ。さあさあ、中入つて。」

○杉本の家

部長と川田が向かい合ってダイニングテーブルに座っている。

川田「部長、本当にすみませんでした！私は何も分かってませんでした。部長が部下一人一人のことを思ってくれていることとか、実は他の人以上に沢山仕事をこなしていることとか：本当にお恥ずかしいです。」

杉本「そんなに褒められると恥ずかしいのはこっちだ。」

川田「怒ってますよね。あの状況じゃ怒って当然です。いつそ、思い切り叱ってください。」

杉本「最近の若者は、自分から叱られたがるのか。随分時代が変わったもんだな、はっはっ。」

川田「部長…？」

杉本「いや、実は君が来る前にね、チームメンバーからも謝罪があつてな。一番に謝罪に来たのはあの星崎君だ。」

川田「星崎先輩が？」

× × ×

回想。

居酒屋・（夜）

星崎「大変申し訳ありませんでした。」

杉本「いいや。謝るべきは私の方だ。チームの状況を正しく把握できないなんて、部長失格だな。」

星崎「部長が誰よりも努力していることは知っています。ただ、それを社員は気付

いていませんでした。そして今回の件でそれぞれが部長の努力を知りました。」

杉本「私だって大層なことはいない。ただ、好きな仕事を好きだけやっていただけだ。」

星崎「ええ、部長がこの仕事を好きだということは傍から見ても明白です。ですから、私は、あのような発言をしても部長が必ず戻ってくると確信しております。手荒な真似をしてすみません。」

杉本「今回、私も自分の行動を振り返ることができた。その点で君には感謝しないとだな。」

星崎「恐縮です。」

× × ×

川田「そんなことが…」

奥さん「この人根っからの仕事人間だから、こうやってゆっくり過ごすのも久しぶりなんです。」

川田「そうなんですネ。」

奥さん「また甘いものばかり食べて。最近
数値が悪いんだから気を付けない
と。」

杉本「はいはい。分かってるよ。」

川田「お体、不調なんですか？もしかして腕
にしているのは…」

杉本「心拍計。医者がうるさくてな。」

奥さん「この機会にもうしばらく休んで、そ
の後復帰するのはどう？」

杉本「そうだな。体調が戻るまではな。」

○道路

川田、考え事をしながら歩いている。

川田M「部長の体調が優れないことを星崎先
輩は知っていて、無理やり休ませた
のか？どこまで視野広いだあの
人。」

○株式会社「Clean Apple」・オフィス

カレンダーが映し出され、商品販売日が近いことが分かる。

黒木「川田、この間頼んでおいたプレゼン資料出来上がってるか？」

川田「ああ、すみません。そこまで手が回ってませんでした。スケジュール管理で手一杯で…」

黒木「仕方ない、参考資料用意してくれ、あとは俺がやる。誰か他に川田のフォローできるやついるか？」

全員、下を向いている。

星崎、手を挙げる。

黒木「じゃあ星崎、フォロー頼む。」

星崎「承知致しました。川田、コーヒー行くぞ。」

川田「はい？こんな忙しい時に何言ってるんですか！？大体、部長に謝りに行ってること間違いを認めたってことですよね！？」

星崎「コーヒー、行くぞ。」

川田「つたく。」

○同・休憩室

川田「星崎先輩は焦らないんですか？このままじゃ絶対に間に合わないですよ、納期。」

星崎「大丈夫。必ず間に合う。」

川田M「どっからくるんだその余裕！」

川田「俺、先に戻ります。失礼します。」

川田、デスクに俯きながら向かう。
部長、ドアを開けてオフィスに入ってくる。全員驚く。

川田「え：部長！？」

杉本「戻るのが遅くなって悪かった。おかげさまで体調も万全。これでまた仕事にも復帰できる。」

星崎「お待ちしておりました。」

川田「ぶ：ぶ：ぶちよく！良かったあ。もうこのまま戻らなかつたらどうしようって思ってた！」

杉本「すまん、すまん。それと、私もチームのみんなの気持ちを尊重できていなかった。これからは心機一転、プロジェクトを全員で成功させよう。」

全員拍手する。

杉本「黒木は状況報告と承認事項のまとめを。鈴木は資料のレビューを頼む。星崎、川田は担当者とすり合わせして今後の日程調整してくれ。みんな、頑張ろう。」

川田「いつも通り。安心感半端ない…本当に良かったあ。」

星崎、川田の頭をポンポンして、ニヤツと笑う。

川田「またかよ…」

○同・オフィス・(夜)

杉本「みんなの協力のおかげで無事、プロジェクトを間に合わせることができた。ご苦労だった。」

全員拍手する。

杉本「謝罪の気持ちを込めて、今日は俺のお
ごりだ！」

川田「フォー！部長かっこいいっす！」

○同・出入口・（夜）

星崎、みんなと反対方向に歩いていく。

川田「星崎先輩？飲み会参加しないんです
か？」

星崎「ああ。ダメか？」

川田「いや、ダメとかじゃないですけど。」

星崎「お疲れ。」

星崎、帰ろうとする。

川田「星崎先輩、一つ聞きたいことがあります。
す。本当は部長の体調が悪いことも、
部長が戻ってくることも全部お見通し
だったからあんな大胆なことしたんで
すか？」

星崎「川田、時計、無くしたことがあるか？」

川田「え、時計ですか？まあ、はい、ありますけど：」

星崎「時計を無くしたとき、その人は時間が分からなくなる。時間が分からないというのは案外不安なものだ。時計を付けていないことに気付かずに左手首を見てしまう。そしてそのとき、時計の有難さ、当たり前にあるものの大切さを実感するものだ。」

川田「当たり前にあるものの大切さ：」

星崎「人は失って初めて知ることがある。愚かだが、美しいと思わないか。今回も俺の選択は正しかった。」

川田「星崎先輩の話、もっと聞きたいです。飲み会、行きませんか？」

星崎「今度にしよう：月曜からまたよろしくな。」

川田 M 「星崎先輩は本当に変な人だし、振り回されてばかりだけど、気になつて仕方ない。この感情を懂れではな

いと信じ込ませることが精一杯な夜
だった。」

第三章 『幸せの正解』

○株式会社「Clean Apple」・オフィス

川田、星崎の前に立っている。

川田「いかがでしょうか？」

星崎「川田、プロモーションの基本を勉強し直せ。それとここはフォーマットに従っていない。」

川田「やり直し」ですよね。」

星崎「よく分かってるじゃないか。やり直し。」

川田M「はあ：今回は何回目です出るのは逆に楽しみになってきたぜ：」

木村「川田くん久しぶり。大きい溜息についてまた何か困ってる？」

川田「いや、いつものことだけど、また星崎先輩にダメ出しされて。ちよつとやる気出ないだけ。」

木村「うん。気持ちわかるよ。きっと先輩として期待して、成長させてくれてるんだと思うけど、あまりにもはっきり言われると人格まで否定されていような気分になっちゃうよね。」

川田、木村の手を握る。

川田M「そうそう木村さん！唯一の理解者木村さん！」

木村「え！」

川田「あ、ごめん、俺はそういうつもりじゃなくて：それもちよつと違うけど！」

木村「ううん、全然いいよ。私は。」

川田「木村さん、それって！」

星崎「川田、何してる。早く戻ってこい。」

川田M「いい雰囲気だったのに：タイミング悪いなー星崎先輩！！」

木村「邪魔しちゃったよね、ごめん。もう行くね。」

川田「木村さん？木村さん！」

川田 M 「もうー。星崎先輩！よくあの性格で嫌われずに済んでるよな：誰からも恨まれてないことが奇跡だろ。」

× × ×

星崎 「川田、今日会社終わった後、予定あるか？」

川田 「飲みに誘ってくれています？」

星崎 「そうだ。この前行けなかっただろ。今日、飲みに行こう。」

川田 M 「何の風の吹き回しだ？絶対になにかあるはず：！騙されるな、川田雄太！」

○同・出入口・（夜）

川田 「店はどこに？予約してますか？料理はどんなものがあります？」

星崎 「質問が多い。全部用意は整っている。黙ってついてこい。」

川田 「…はい。」

川田、背後から気配を感じて振り向くが誰もいない。

川田「気のせいか：あ、星崎先輩待ってください！」

男が二人のことを後ろから付けている。

○同・会議室

杉本が前に立っている。チームメンバーは椅子に座って杉本を見ている。

杉本「知つてのとおり、来月から我が社の社運をかけた一大プロジェクトが始まる。そのプロジェクトの責任者として今回私が指名したいのは他でもない星崎君。君だ。」

星崎、立ち上がる。

星崎「はい、部長。」

杉本「このプロジェクトでは掃除用具と新技術を掛け合わせた全く新しい掃除の形を世間に提案する。公の場で君が我が

社の顔として新商品の発表を行うことになる。星崎君、できるか？」

星崎「出来ます。喜んで承ります。但し、一つ条件がございます。」

杉本「なんだね、言ってみなさい。」

星崎「川田をこのプロジェクトに入れてください。」

川田M「ぬ！？俺！？」

星崎「彼は優秀な社員です。彼がいなければプロジェクトが成功する未来はありません。」

杉本「そこまで言うなら、仕方ない。良いだろう。彼をチームに加える。」

星崎「ご理解いただき、ありがとうございます。」

川田M「何だ、何なんだ、何を企んでるんだ
…騙されるな、俺！」

○同・会議室

新プロジェクトのメンバーが入ってくる。川田、入口付近の椅子に座ろうとする。

星崎「川田、俺の横に来てくれ。」

川田「え？はい、分かりました。」

星崎「プロジェクト開始に当たり、まずスケジュールを確認したい。鈴木さん、プロモーション期間はどのくらい必要ですか？」

鈴木「チームの人材とパートアルバイト含めざっと16日は掛かりますかねえ。」

星崎「先ほど課長に共有頂いた商品開発の期間は25日。さらにそこにコミュニケーションコストの3日を含めると、全部で40日必要ということになります。それではこれをもとに…」

川田、メモ帳で計算する。

川田M「ん？今の話だと正解は44日じゃないか？…てことはつまり、星崎先輩、間違ってる！あああ、こんな小学生で

もできる計算間違っやんの！はっは
っは！」

川田「星崎先輩、全工程に必要な日数は44
日です。間違いなのでやり直し、お願
いします。」

川田M「どうだ、星崎！俺の気持ちを味わ
え！」

星崎「川田、そうだな。訂正感謝する。お前
がいなかったら後々どうなっていたこ
とか。お前をこのプロジェクトに入れ
て正解だった。それでは…」

川田「…どういたしまして…」

川田M「これじゃまるで俺が大人げないやつ
みたいじゃんかよ。悔しい…」

○同・オフィス

星崎「川田、昼飯おごってやる。」

川田「え、いいんですか！？ぜひ、行きまし
よう！」

○道路

星崎「川田、俺から離れるなよ。」

川田「はい。」

川田M「先輩がおごってくれるなんて初めてだ。ここ最近俺をプロジェクトに入れたり、わざわざ隣に座らせたり。ひよつとするとようやく俺の実力を認めしてくれたのかも。」

星崎「いつも感謝している。これからもよろしくな、川田。」

川田M「なんだ。星崎先輩のこと、何か企んでるんじゃないかと思ってたのが申し訳ないくらいだ。期待してくれている分、今度の製品発表会は俺も頑張ろ。」
男が二人のことを後ろから付けている

○掃除製品展覧会

多くの人でごった返している。

チームメンバーが会場に入る。

川田「うわーすげえ。人でパンパン。」

鈴木「こんな大規模な展覧会は久しぶりで腕が鳴りますなく」

案内人「関係者の方ですね。裏の控え室はこちらです。」

チームメンバー、移動する。

○同・控え室

星崎、資料を読んでいる。

星崎以外のチームメンバーは外に向かう。

川田「星崎先輩、発表まで時間ありますし、

ライバル企業の製品見に行きませんか？」

星崎「俺は行かない。俺抜きで行って来い。」

川田「分かりました。」

○同・製品紹介コーナー

川田、一つのコーナーで立ち止まる。

西川渉（30）、接客している。

川田「あ、この商品便利そう。あの、どうやって使うんですか？」

西川「あ、あなたは…」

川田「俺のこと知ってます？」

西川「い、いえ、人違いです…そちらの商品

は…えっと…」

川田、不思議そうに首をかしげる。

○同・発表会場

川田、鈴木、星崎が舞台袖にいる。

川田「うわ…俺が発表するわけじゃないのに
緊張する…」

鈴木「星崎君ならきつとうまくやるさ。特に
アクセシビリティがない限りね。」

川田「あ、いよいよですよ。」

司会「続いている発表者は株式会社「Clean

Apple」、星崎忠さんです！」

星崎、舞台に向かって歩き出す。

西川、星崎に向かって走ってくる。

西川「星崎いー！！！」

川田「星崎先輩、危ない！」

川田、星崎を守って西川のタックルを受けろ。

西川「離せ…！」

川田「ん？あなた、さっきの…」

星崎、動じず登壇する。

星崎「お騒がせ致しました。それでは我が社の新しい製品…」

西川、警備員に連れていかれ、川田はその姿を見ている。

× × ×

星崎「これが、我が社の新製品「Extreme

Cleaner 2000」でございます。ありがと

うございました。」

会場に拍手が鳴り響く。

川田M「さっきのは何だったんだ。完全にあの人は星崎先輩を狙っていた。あの二人に一体、何があったんだろう。」

○同・出入口

西川が警察に取り押さえられて連行されそうになっているところに星崎を含むメンバーが通りかかる。

星崎「おい西川！久しぶり。元気そうだな。」

西川「元気なわけないだろ！？この野郎！！」

西川、暴れて警察に強く抑えられる。

星崎「西川、動機を教えてください。どうして俺を襲おうとした？」

西川「星崎、お前は覚えてないだろうな。5年前、俺たちが同期として会社に入社した頃だ。」

× × ×

回想。オフィス。

西川「よろしくお願いします！」

星崎「よろしくお願い致します。」

× × ×

西川「お前と同じ部署に配属になったことが、俺の暗黒時代の始まりだった。」

× × ×

回想。オフィス。

社員「星崎君は仕事が早いなあ。」

星崎「いえ、やるべきことをやっているだけですの。」

社員「それが簡単そうで一番難しい。実際、できない人もいるからねえ……」

西川、聞こえないふりをして仕事を続ける。

× × ×

西川「それから俺はその環境に耐えられなくなり、退職した。そのあともあの事がトラウマで……つまり、お前のせいで人生滅茶苦になったんだ！」

星崎「それで、俺を倒すことが西川の幸せになるのか？それで必ずお前は幸せになれるのか？」

西川「は？」

星崎、西川の胸倉を掴む。

星崎「俺を倒して悲しむ家族、知人、お世話になった人のことも含め、幸せになれるのかお前は！？」

西川、俯いて泣き出す。

西川「幸せに、なりたい！：！幸せになりたかっただけなんだよ、俺は！：！」

星崎「今からでも遅くない。今日のことは無かったことにする。またどこかで会おう、西川。」

西川「星崎：ごめんなさい：ごめんなさい：！」

西川、泣き崩れる。

川田、西川を見ている。

○道路

星崎が川田の前を歩いている。

川田M「この人、俺がいなかったら今頃病院だったかもなー。」

星崎「川田、俺は分かっていたぞ。お前が俺を必ず守ると。」

川田「え。」

星崎「人が良すぎると損をする。今後は利用されないように気を付けろ。」

川田 M 「つまり、襲われる可能性があるとかかっていて、警護として俺を連れまわしてた！？くっまたやられた…」

星崎 「お前を信じるという俺の選択は正しかった。今日は疲れたろ。気を付けて帰れよ。」

星崎、優しく微笑む。

川田 M 「すっげえ悔しい。けど…」

川田 「嫌いになれねえ…」

最終章 『恋愛の正解』

○株式会社「Clean Apple」・オフィス

川田、パソコンを見ている。

木村が近くを通りかかる。

川田 「あ！木村さん！」

イケメン社員が木村さんに話しかける。

川田 M 「むむ！ライバル出現！？しかもイケメン…！」

× × ×

星崎、パソコンで仕事している。

川田、星崎の前を行ったり来たりして
いる。

川田「メール送るか：送らないか。送るか？
送らない：いや、やっぱ送ろう。うー
んでも。こういう時こそ星崎先輩に聞
くか。うん、そうしよう。いやでもそ
れは俺のプライドが許さない：えー：」
星崎「川田、何をもじもじしている。話があ
るなら話せ。」

川田「べ、べ、別にありませんけど。」
星崎「なら俺の前をうろつくな。集中できな
い。」

川田「：はい、すみません。」
川田、星崎の席から離れようとするが
引き返してくる。

川田「星崎先輩、もし仮に星崎先輩に好きな
子ができて、でも相手に恋人がいるか
分からないとき、どうします？」

星崎「聞く。」

川田「ですよね、失礼します。」

星崎「川田。川田の好きな人は磯原さん、竹中さん、木村さんの中にいるか？」

川田「はい……」

星崎、パソコンのキーを勢いよく押す。

星崎「なら今3人にメールを送った。後は返信を待つのみだ。」

川田「はい……って、え？な、な、何のですか？」

川田、携帯のメールを確認する。

星崎M「みなさん、恋人はいますか？返事は

川田に送ってください。」

川田「星崎先輩、なんてことを！」

川田の携帯の通知で3人からの回答が返ってくる。

川田「磯原さんは……彼氏がいます。羨ましいでしょ？……うん確かに羨ましい。で、竹中さんは……なぜ言わないといけないんですか？……ごもつともです！すみません！」

川田、木村のメールを開ける。

木村M「恋人はいません。」

川田「…木村さん、恋人いないんだ。良かった。(いや待てよ…完全に好きなことばれてないかこれ。)」

○居酒屋・(夜)

川田と森下が一緒にお酒を飲んでいる。

川田「もう俺ダメだ。好きバレ、つまり試合終了だ！」

森下「まだ何も始まってないだろ。大丈夫だって。」

川田「そう？でももし次会ったとき気まずかったら？友達以下になったりして…会社やめた方がいいのかも。」

森下「けどさ、3人にメールしたなら、木村さんは川田が好きな人特定できないんじゃないかね？」

川田「確かに…一理ある！」

森下「メール、見してみ。」

川田、森下に携帯を渡す。森下、木村さんにデートの誘いメールを送ってから川田に携帯を返す。

森下「はい。」

川田「おう。…ん？今度良ければ夜ご飯食べませんか！？は！？お前何してくれちゃってんの？」

森下「大丈夫、大丈夫。」

川田「何が大丈夫だよ！？ちよ、言ってみろ…」

川田の携帯に通知が来る。

森下「もしかして木村さん？」

木村M「はい。ぜひ！」

川田「やった。やった、やったー！！」

川田、森下とハイタッチする。

○公園

川田、携帯を見ながら立っている。

川田「木村さんまだか…」

川田 M 「デートで正しい選択をするには、星崎先輩を思い浮かべるのがベストなはず。よし！第二の星崎、誕生！」

木村、小走りで近づいてくる。

木村 「ごめん。待った？」

川田 「ううん、全然。俺も今来たところ。」

川田、星崎の姿を想像して覚醒。

川田 「俺を待たせるとは、面白い女だ。」

木村 「へ：？」

川田 「い、行こうか：？」

木村 「うん：」

○商業施設・イルミネーションの前・（夜）

木村と川田が二人で歩いている。

木村 「わあ。綺麗。」

川田 「ほんと。凄いなあ。」

木村 「これどれくらいの量の電球使ってるの

かな？？」

川田 「どうだろうな：」

川田、星崎の姿を想像して覚醒。

川田「何万ものイルミネーションより、あなたの方が何億倍も美しい。」

木村「…どうしたの急に。」

川田「さあ、ディナーを食べに行こう。」

木村「…」

川田、満足気にうなずき、早足で歩く。

木村、俯きながらあとを付いていく。

○高級レストラン・（夜）

クラシック音楽が流れている。

二人、話さずに黙々と食事を取る。

川田「木村さん、食事、口に合わなかった？」

木村「ううん。食事は、美味しい。」

川田「そっか…なら良かった。（笑）」

木村「…」

川田「…せっかくならワインも頼もうか。」

木村「川田君ってワインとかこういうお店好

きなタイプだったっけ？」

川田「いや、俺は普段…。」

川田、星崎の姿を想像して覚醒。

川田「こういうお店以外行かないよ。」

木村「：川田くん：そろそろお会計もらおうか。」

川田「え、ワインもデザートもまだなの？」

木村「うん。」

○道路・（夜）

木村、川田の数歩先を歩く。

川田「木村さん、また今度さ、どっか二人で行かない？今日はすごく：」

木村「川田くん。なんか今日の川田くん別人みたいだった。私が思ってた川田くんとはイメージ違って少し驚いちゃった。」

川田「どういう意味？」

木村「歩き回ったせいかな。なんか疲れちゃった。私、帰るね。おやすみ。」

川田「木村：さん。」

川田M「これで本当に終わった。俺は選択を間違えたんだ。」

○株式会社「Clean Apple」・出入口

星崎、会社から出てくる。

川田「星崎先輩！」

星崎「川田、休日だろ。若いうちは休め。」

川田「星崎先輩、俺は星崎先輩が全てにおいて正解だとは思いません。今日、木村

さんとのデート失敗しましたから。」

星崎「そうか。それで、お前にとっての正解はなんだ？」

川田「それは：試しても失敗するだけです。」

星崎「ふっ。答え合わせもせずに試験を抜け出すとは大したもんだな。」

川田M「俺だって、俺だってやりたいことは他にあった。本当はいつもの居酒屋で

ゆっくり喋るだけでも良かった。でも、その勇氣は無かった：」

川田「星崎先輩、ありがとうございます！俺、行ってきます。」

川田、走っていつもの居酒屋に向かう。

○居酒屋・（夜）

川田、居酒屋に息を切らして入ってくる。店内を見渡すが、木村の姿はない。

川田「はあ…ダメか…」

川田、店を出る。そこに木村が来る。

木村「川田君？」

川田「木村さん…あの、さっきの俺は本当の俺じゃないんだ。本当の俺はカッコいいことも言えないし、ワインも飲めない。高級な店より大衆居酒屋が好きな。そんな奴なんだよ。でも、木村さんのことが好きだ。だからもう一度俺にチャンスをください！この居酒屋でもう一度デートをやり直させて欲しい！」

木村「ふふ。やっといつもの川田くんになった。もちろん、凄く嬉しい。」

川田「木村さん、好きだ。」

木村「ん？」

川田、木村に勢い良く抱きつき、木村は驚きつつも笑っている。

○株式会社「Clean Apple」・エレベーター前

川田、星崎の隣に行く。

川田「星崎先輩、あの後俺と木村さん付き合
うことになりました。」

星崎「そうか。」

川田「カップルって最高ですよ。星崎さんに
はいるんですか？恋人。」

星崎「今はいない。しかしその気になればす
ぐできる。」

川田「またまた。強がっちゃって。」
二人ともエレベーターに乗る。

星崎「見ておけよ、川田。」

川田「何をですか？」
星崎、たまたま乗り合わせた竹中さん
を壁ドンする。

川田M「えっ！」

星崎「竹中さん、あなた私のことが好きです
ね？」

川田M「いやそれはさすがに…」

竹中さん「なんで分かったんですか？」

川田、口を開けて停止する。エレベーターの扉が開く。

星崎「口があいてるぞ、川田。」

○同・オフィス

川田、星崎の前に立っている。

川田「俺は星崎先輩が苦手だ。なぜかって？」

それは……」

星崎「川田、こことここ、間違ってるぞ。やり直し。」

星崎の眼鏡が光り、『絶対正解、星崎先輩』のテロップが出る。